【日本移民の日2021年】木村政彦とエリオ・グレイシーの偉大なる戦い＝１９５１年、マラカナンスタジアム＝得意の大外刈りと腕がらみが炸裂＝愛知県在住　小説家　増田俊也

【腕がらみを極める】１９５１年１０月２３日、マラカナンスタジアムでエリオ・グレイシーと戦った木村政彦は得意の腕がらみでエリオを破った。グレイシー一族は木村政彦に敬意を払い、この技に「キムラ」と名前を付けた（提供写真）

私は日本柔道史上最強を謳われる木村政彦先生のことを１８年かかって取材し、一冊の本を１０年前に上梓した。その物語の大きな山場こそ１９５１年にマラカナンスタジアムで戦われた木村政彦対エリオ・グレイシーの試合である。

『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか』（新潮社）という長い題名のその書籍は、軽薄短小のこの時代に百科事典のように分厚く高価で、しかも歴史から忘れられていた木村政彦を扱ったものなので出版界からは「売れるわけがない」と言われた。

しかし増刷に増刷を重ね、ハードカバーだけで２８刷という記録的な売り上げとなった。それはこの本が単なる柔道の話ではなく、木村政彦という主人公を通して一緒に世界を旅し、戦前戦後の歴史を追体験するような感覚を読者が得られたからであろう。

米国カリフォルニア州にグレイシー博物館という記念館があって、エリオが木村政彦に敗れたときに着用していた柔術着が一番目立つ場所に誇らしげに飾ってあるという。７０年も前に戦われたこの試合はグレイシー一族にとって単なる敗北ではなく、誇りにまで昇華されている。エリオだけではない。現在世界中で隆盛のＭＭＡ（総合格闘技）の選手たちにも畏敬をもって語られる伝説の試合だ。

と尻込みした。

「よし。俺が挑戦を受けよう」

□木村政彦がついに立ち上がる。１９５１年１０月２３日、マラカナンスタジアムには副大統領ほか政財官界の要人も来て、フィールド内に設置された数万の観客席は超満員となった。日系人たちは木村政彦にすべてを託していたがどちらが勝っても暴動が起こりえる空気があった。日系人もブラジル人も代理戦争にいきり立っていた。ために館内あちこちにライフル銃を構える武装警官が配備されていた。

全盛時代の木村政彦。拓大卒業の記念写真で２２歳のときのもの。１９３６年に負けて以降、木村は一度も負けずに不敗のまま引退し、「木村の前に木村なく、木村の後に木村なし」と称えられた（提供写真）

２０１０年、エリオの３男ヒクソン・グレイシーと対談した増田（左）は日本の陶器をプレゼントした（提供写真）

エリオの腕を道衣で縛って横三角絞めを狙う木村（提供写真）

□この物々しい空気のなかで木村政彦は大外刈りでエリオを後頭部から叩きつける。これで失神を狙ったのだがマットが柔らかすぎて失敗。そのまま寝技戦となった。最後は木村が得意の腕がらみを極めたがエリオがタップしない。木村はしかたなくエリオの腕を折って勝利を収めた。

□しかし当局が心配するような暴動は起こらなかった。２人の全力の戦いは大観衆を魅了し、ブラジル紙は木村の強さを称え、邦字紙は敵方のエリオが参ったしない精神力を称えた。

□木村政彦は１９９３年に日本で亡くなった。エリオ・グレイシーはその６年後、５男ホイラーの試合に随伴して念願の初来日を果たす。講道館を訪れたエリオは木村政彦の写真を見て目に涙を浮かべた。

□「私はただ１度、柔術の試合で敗れたことがある。その相手は日本の偉大なる柔道家木村政彦だ。彼との戦いは私にとって生涯忘れられない屈辱であり、同時に誇りでもある」

増田俊也（ますだ・としなり）１９６５年愛知県生まれ。小説家。北海道大学中退。著書に『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか』（新潮社）、『七帝柔道記』（角川書店）など。